鳥女

素九鬼子

角川書店

烏女

昭和五十二年五月三十一日　初版発行

著者　素九鬼子

発行者　角川春樹

発行所　株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―一三―三
電話（〇三）二六五―七一一一（大代表）
郵便番号一〇二　振替東京三―一九五二〇八

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　株式会社宮田製本所

Printed in Japan　0093-872186-0946(0)

烏女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

「草刈りに行かん？」

「行く！」

日曜日の朝になると、きまったようにしげのはやって来た。窓の下に立ったしげのは、いつも笑っていた。赤い頰をしていた。色黒はお互いさまであった。が、彼女の方が少し勝っていたように思う。髪の毛には、大抵藁しべが付いていた。牛小屋にもぐりこんでは世話をするからだった。しげのは頭の藁しべを十本の指で梳くようにした。友だちの手前を少しは気にしていたのだ。それでも一本や二本の藁しべではないので、幾度も頭の毛を搔きしごいているうちに諦めてしまうのだった。

絣のモンペに毛糸のセーターを着ていた。セーターの袖口は、毛糸がほつれていた。他の毛糸で繕いをしていたが、それでもほつれていた。だから両方の袖の長さが、大概まちまちだった。夏は、母親の手で縫った黒いスカートに白いブラウスだった。明けても暮れても同じ物を

着ていた。たまに着換えると、それがとびぬけて不恰好なだぶだぶのものだった。首の辺りには、飯粒とか味噌汁の実がこびりついていた。これはしげのの名誉のためにいっておくが、彼女が自分で食べ滓を付けたのではない。弟たちがこの姉に纏わり付くたびに、汚れた手や口を否応なしに擦すりつけるからだった。心のやさしいしげのは、こんな時でも、ちび共を邪険に遠ざけたり怒ったりはしなかった。十一や十二の少女ともなると、世間体とか風の悪さを先に考えるものだが。私の知る限り、しげのは弟たちにやさしかった。彼女は九人兄弟のまん中で、一人娘であった。まるで幼稚園の保母さんのようなてんてこ舞いの生活を、彼女は毎日送っていた。だのに、今考えてみてもちょっと不思議なのだが、このしげのには、子供らしからぬ一種の余裕というものがあった。

少女にしては、草を刈るにしても手付きが堂に入っていた。鎌の使い方など、いくら農家の生れで、小さい時から鎌を持ち慣れているからといっても、やはりしげのの場合は特別見事だった。われわれは鎌を力を入れて握り、急いで振る。できるだけ早く籠を草でいっぱいにしようとして焦る。しかし焦れば焦るほど、手捌きは乱れるものだ。そこのところを、しげのは経験によってよく呑み込んでいた。どんなに急ぐ時でも、彼女の鎌の振り方は堂々としていた。私がいくら頑張ってみても、しげのには叶わなかった。こちらがやっと籠に半分くらい草を刈った頃、あっちはもう山盛り詰め込んでいた。しかも彼女の籠は、もっこのように大きな背負

籠だった。こっちが体中に汗をかいていても、あっちはそれほどでもなかった。

われわれ二人は、始終一緒に草刈りをしたものだ。他に遊ぶことがなかったわけではない。女の子の遊びなら、いくらもあった。縄飛び、木登り、人形ごっこ、ままごと、お手玉、石蹴り、手毬突き。だのになぜわれわれ二人は、ああもよく草刈りをしたのだろう。二人共、子供じみた遊び、女の子らしい遊びには飽いていた。多少は軽蔑もしていた。大人っぽくやりたかったのだ。何か役に立つこと、それが遊びに結び付くなら、大人に褒めて貰えるなら、自分らもこの上なく楽しくやれるというのなら、それに越したことはなかったのである。

私は兎を三羽飼っていた。牝山羊も一頭飼っていた。両方とも、無理やりねだって他家のを借りてきて飼っていた。家の者は、生きものは必ず死ぬ、それが怖い、恐ろしい、不吉だと、始めのうちは仲々許可してくれなかった。しげのの家には、山羊や兎の他に牛が三頭もいた。草はいくらあってもありすぎることはなかったのだ。草刈りは、大人のやることじゃない。これは子供の領分だ。そして、こればかりは一人で黙々と刈ったのでは楽しくない。競争しながら、わいわいさざめきながら草を刈る。これほど面白いことはないのである。とにかく夢中になれる。子供ながら労働のよろこびが十分に味わえる。流れる汗を服の袖で拭う。時には額から流れる汗をぺろぺろ舌で嘗(な)めずって塩からさを味わう。やがて、小川の流れに身を躍らせて行くのだ。ざんぶと跳びこんで、水を掛け合いながら、さっぱりとするのである。それから籠

に詰めた草の上に腰を下して、無駄話の花を咲かせるのであった。
どうしてあれほどまでにしげのと馬が合ったのか。他に友だちがいないわけではなかった。同じ年頃の女の子は、私の家の近くにもいた。遠く家が離れているわれわれ二人だが、気の合う仲だとお互いに思っていた。彼女はけっして人に逆らわなかった。従順で大人しかった。それでいて、しっかりした芯をもっていた。記憶を掻きまわしてみても、しげのと私が喧嘩をしたということはない。私の方は鼻っ柱の強い、生意気な我儘な子であったが、このしげのを相手にすると、とたんに別人のように素直になった。それを回りの者もいっていたし、私自身も自覚していた。きっとこれは、一種の恋だったのだろう。とりわけてはいえないが、二人が一緒にいると、なんということもなしに気分が落ちつくのだった。土くさいしげのの体全体から匂ってくるものが好きだった。そういうものが、私にファンタジックなものを呼び醒ますのであった。
特別なことをいうわけでもない彼女だった。野道を歩いていてふと空を仰いだり、道端の草を一本引き抜いて輪にして指輪にしたり、人のいやがる毛虫を肩に這わして平気でいたり、小川の流れに唾を吐いては、それが水玉となって流れてゆくのを暫く眺めている。雨になっても滅多に傘はささず、頭から濡れて面白がっている。父親に叱られた、祖母に叱られたといっては、呪いをこめて何ごとか呟やきながら地面に穴を穿(あ)けている姿——。今でも思い出の中に彼

女の姿が浮かび上ると、それが彼女か私自身だったのか、もうはっきりと区別がつかなくなってくるほどだ。

遊び疲れると、どろんこの足で小川に跳び込んだものだ。流れを遡ったり下ったりしながら、めだかや鮒を追いかけた。川底の砂利を足で掻きまぜては、水を濁して魚をびっくりさせた。寒い季節でも暑い季節でもおかまいなしに、小川はわれわれの気に入りの遊び場所だった。それから橋に腰を下して足をぶらぶらさせながら、流れをぼんやり眺めていた。

振り返ると、夕陽が山の上に掛っていた。農夫が牛をひいて通って行くのが見えた。

「あっ、お父じゃ！」

ぶるっと体を震わせて、しげのは弾かれたように立ち上った。そして草の詰った重い籠をひょいと肩に背負って、小走りに帰って行くのだった。父親よりも一足でも早く家に着いていないと、小言をくうのだ。この忙しいというのに遊び呆けているどは。草刈りはずるける口実なのかと、大声で怒鳴られるのである。百姓家の子が、そうでない家の子と一緒になって時間も打ち忘れ、日の暮れまでぼんやりしておるようなことは赦さぬぞと、しげのはしょっ中、父親から小言を貰っていたのである。

彼女の家では、私と付き合うことを快くは思っていなかった。私はともすると、彼女を強引に遊びに誘い出した。彼女の家の事情も考えずに、ただ私の気の向くままに、無理にも外へ誘

った。山や川、寺へ泉へ学校の運動場へ、私の家の裏山へ、竹藪へというぐあいにだ。心のやさしいしげのは、つい断りそびれて付いて来た。彼女を、私以上に必要としている小さな弟たちに後髪を引かれながら。いつもこそこそと、悪いことでもするような気持で。

「いんや、あんたは、うちのことで心配はいらんけん。母やんだけは、うんというたけん」

しげのは、私を安心させるためによくいったものだ。こちらは、そのことばが嘘であることを、よく承知していた。しげのは子供ながら、私のように心おきなく、時間を忘れて遊ぶことはできない立場にあったのだ。それなのに、しげのは一度も恨みがましい文句をいわなかった。こちらが同情して、少しくらい慰めてやろうとしても、それを打消した。しかし、しげのだけがそうではなかった。農家の子で、この当時、遊びに夢中になっている子などいなかった。大人と同じように、畑や田に出て働いていた。小さい子でも、長い竿を振り廻して鳥や雀を追った。草を刈ったり、豆むしりをしていた。田の草とりも一人前にしたものだ。

「そりゃあ、あの子の家は昔は地主じゃったかもしれんわいの。そんでこの家の爺は、荷車に米俵を積んであの家の門に横付けにしてから、ぺこぺこ頭を下げさせられとったかもしれんわいの。が、どうぜや。今は時世（ときよ）変って反対じゃ。あの家は零落（おちよ）れる一方じゃないかい。その証拠に、ちとこば残った土地や山まで切り売りしよるというこっちゃないかい。この前、寺の下で旦那に会うたが、顔を外向けて物も言いくさらざったぞよ。昔を思うと心細うてはずかし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ゅうて、わしらの顔さえよう見んらしいわい。孫は、学校の弁当に麦ばっかし入れとるそうなじゃないか。そんでも毎日、しげのを唆かして、あの子は遊び放けておるわ。あなん家の子と一緒に遊んだりすな。もうこっちは自作で安気なもんじゃ。精だして働けや。働いただけわが家のためになるんじゃけん。子供じゃてから、そうなると遊んどるのが勿体ないと思わんかや。世の中ちゅうもんはのう、巡り巡っていくもんじゃ」

しげのは、父親から耳にたこが出来るくらい聞かされていたのだ。けれどもそんなことを、口にも顔にも出すしげのではなかった。ある日彼女を誘いに行った時、思いがけず父親の説教を立聞きして、私はさびしい思いをしたことがある。

中学三年の終り頃のことだった。突然、私は先生に呼ばれた。

「あの、お前と仲のええ、しげののことじゃが」

若い男の先生は、徐ろにいった。しげのを高校に行かせるように、それをしげのの頑固な父親にいってやってほしいというのだった。なぜそれを先生自身がいわないのかとは、私は敢えて切り返さなかった。先生もまた、彼女のひねくれ者の片意地な父親はにがてだったのだ。とても若い教師など歯が立つ相手ではなかった。

しげのは、クラスで十番くらいの成績だった。殆んど勉強をしないでそのくらいなのだから、しげのは頭がよいと、私はいつも思っていた。先生もそう思っていた。そんなしげのなのに、

高校に行かず、この儘学校をやめてしまうのは、先生にはどうしても可愛想に思われたのだ。しげのにとっても惜しいことだった。だからといって、家の者を説得する自信はなかった。仲のよい私になら、力になってやれるのではないかと考えたのだろう。友だち同士だから気軽に話してやれるだろうと。

しかし、私ならよけいに難しいことにならぬだろうか。あの父親は、私の顔を見ただけで気持を掻き乱しかねない。彼の殺気立った眼付を、私は想像するだけでびくびくしたものだ。が、その時、私はある勇気を奮い起した。しげののためになることなのだ。それをしてやれるのは、この私だけなんだと。

「やってみますよ、先生。しげちゃんのためですけん」

私の義侠心に、先生は眼を丸くした。それから、安心したように頷いた。

私とて自信はなかった。けれど、根気よくやってみようと決心した。一度では成らぬことがわかっていた。怒鳴られることも覚悟せねばならぬ。しげののためだ。しげのの将来のためだ。しげのの人生に関することだ。友だちとして一肌脱いでやれるなら、気は重いがやり甲斐のある役目ではないか。

しげのの父親は、野良で働いている時、その脇を私が通って挨拶をしても、返事をしたことがなかった。見向きもしなかった。しかし私が通り過ぎてしまうと、彼はそっと頭を上げて、

振り返って、見送っていることがあった。そんな時、私もまた立ち止って、わざとじっと彼を眺めていたものだ。まるで二人とも意地を張っているようであった。

ああそれなのに私は、いざとなるとしげのの父親に、母親にさえも、一言も進学についての先生の意向を伝えてやることができなかったのである。

私はしげのの家に行くことは行った。それをいうためにだ。その日は雨が降っていた。特に雨の日をえらんだのは、父親が必ず家にいると思ったからだ。そして、雨の日というのは、人の心がなんとなしに潤っていると思ったからである。からからに干からびた彼の心にも、自然の雨ならよいおしめりになるだろうと考えたからだった。実際に農夫は、日照りの後の雨というのを何よりも歓ぶものだ。

しげのの父親は、狭い中庭で濡れながら牛の世話をしていた。牛の下に潜って、湯桶にタワシを浸けては、牛の体を擦すっていた。明日の農業祭の品評会に牛を連れて行くのだった。

「あのねえ、おいさん――」

牛の息が、雨の中に白く煙っていた。彼の息も忙しげに、牛の息とまじっていた。しげのの母親は、母屋の土間で莚を編んでいた。その母親の胸には、まだ二歳にもならぬ赤ん坊が入っていた。カンガルーの赤ん坊みたいに。私は思わずそっちに気をとられてしまった。赤ん坊は大きな乳房を手に持って吸っていた。片方の乳は、私が見ていると、母親がそっと着物の中に

しまった。
しげのの父親は、タワシを動かしながら、明らかに私が何かいいだすのを待っていた。私は黒いこうもり傘をさしていた。その傘の骨が一本折れかかっていた。曲った骨が布を突き破り、その穴から雨がぽたぽたと落ちてきた。私の髪の毛は、そのために濡れていた。いっそこれなら傘を畳んだ方がよかろうと思い、のろのろと傘をすぼめた。口から出かかることばを、私は何度も呑み込んだ。
「あのう――、おいさん、うちのお婆ちゃんがね、おいさん所で牛蒡の種を分けてほしいというとりましたけんど……」
口から出任せの嘘をいいながら、私は顔を赤くしていた。納屋の軒先で草を切っていたしげのは、ほっとした表情をしていた。
しげのの父親は、依然として黙っていた。そしてその顔は相変らず憮然としていた。一心に手だけは動かしていた。牛が動くと、どー、どー、と怒鳴っていた。
しげのの母親は、土間の方から私に声をかけた。
「お安いご用じゃけんと、そうお婆はんにお伝えしておくれんや。いつでも分けて上げますけにねえ」
私は帰り道で考えた。人のお節介はやめにしようと。出しゃばったことをすると、結局はし

げのに対してとんでもない迷惑をかけることになる。あの場の雰囲気には、私が口を挟む余地など、とうていありはしなかった。目に見えぬ厚い壁が、ぎりぎりと私の前に立ちはだかっていたではないか。私に勇気がなかったのではないのだ。私がしげのを見捨てたのではないのだ。あの家には、あの家の者しか入ってはいけない。他人が、子供の私が、たかが安物の友情にかられて入り込んで行こうとしても、それは無理な話なのだ。第一、本人自身が気の進まぬことを、諦めていることを、どうして他人が口を出す必要があろう。しげのは一度でも私に、進学をしたいといったことがあったろうか。赤の他人が彼女の家に波を立てることなど許されぬことだ。仮りにそんなことをしたら、しげのは内心で私を恨むだろう。そうに違いないのだ。先生も、そこのところを私よりも早く理解はしていた。それでも私に頼んだというのは、友だち同士ならばもっと軽い気持でものをいえるかもしれぬと考えたにすぎないのだ。

　義務教育を終えたら、それでもう学校というものからはおさらばだ。百姓を手伝いながら、夜は近所の娘から洋裁や和裁を習う。やがてどこかへ嫁に行く。問題は、しげの自身がそうした人生を、けっして不幸だとか、なさけないとか、淋しいとか虚しいとか思っていないということだ。昔ながらの村のでこぼこ道、その道に深く掘れこんだ轍の跡を、しげのはよろけながらもしっかりと踏みしめて行こうというのである。母親や祖母のようにだ。とりあえずそうしようというのではない。その道が自分にも向いていると思うからだ。他に廻り道も近道もあろ

うが、眼の前に折角ひかれている道を、わざわざ外れて行くこともなかろう。どうせ行き着く場所は、似たり寄ったりなんだ。

しげのは二十歳で、同じ村の男と結婚をした。見合さえも碌にせず、祝言を上げた。もっとも、見合などする必要はなかった。いつも顔を合している仲だったから。そして、しげのは四人の子を産んだ。最初の子は死に、三人の子が育った。祖母も母親もそうしたように、しげのも牝牛のように働いた。働くことしか知らぬ女だと陰口をきかれるくらい、この百姓女は働くのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.